

# トーキーの英語とイギリスの反応 —1920年代末のハリウッド映画をめぐって—

山口 美知代

## 1. はじめに<sup>1</sup>

### 1.1 本稿の目的

本稿の目的は、1920年代末に発声映画（トーキー）が現れたときに、そこで使われているアメリカ英語に対してイギリス人がどのような態度を示したか、観客がどのように受け止め、評論家やジャーナリストがどのように評したかを、当時の新聞、雑誌記事を調査して明らかにすることである。

1920年代、イギリスの映画製作はアメリカに大きく後れをとっていた。1927年にはイギリス国内映画産業をハリウッド映画から保護するために映画法が制定され、外国映画の上映を制限するクォーター制度が導入された。しかしハリウッドはさらに先を行き、トーキー製作を始めていた。

イギリスの映画館でも、1928年以降、ハリウッド製作のトーキーが上映され、アメリカ英語が観客の耳に届くことになった。イギリスが独自のトーキーを製作するのは1929年のことである。

映画館でハリウッドのトーキーを見たイギリス人たちは、アメリカ英語にどう反応したのだろうか。好奇心、興味、反感などいろいろな思いがあったことだろう。本稿では、彼らの反応を表す具体的な言葉を集め、1920年代末のイギリス人のアメリカ英語に対する言語態度、とりわけ映画のなかのアメリカ英語に対する言語態度を考察する。

### 1.2 トーキー到来

「最初のトーキー」と言われる映画『ジャズ・シンガー』(*The Jazz Singer*)がニューヨークのワーナーズシアターで初公開されたのは1927年10月6日のことだった<sup>2</sup>。この映画がイギリスで初公開されたのは約一年後の1928年9月28日、ロンドンのピカデリーシアターにおいてである<sup>3</sup>。

ロンドンでの上映の様子を詳しく伝えた音楽雑誌『メロディメーカー』(*The Melody Maker*)<sup>4</sup>

誌の記事「トーキーのデビュー—『ジャズ・シンガー』上映で何が起こったか」に従って、当日の演目を見てみよう。『ジャズ・シンガー』は単独で上映されたのではなかった。序曲 (overture) に続いて、声楽独唱など音楽の出し物が4つあり、次に近日上映予定のトーキー『ザ・テラー』(*The Terror*) の予告編が流れた<sup>5</sup>。休憩のあと本篇である『ジャズ・シンガー』が上映された。プログラムはサイレント映画の上映形式と同じであるが<sup>6</sup>、サイレント映画とは違いオーケストラや歌手はその場にはおらず、映像と音楽が同時に再生上映される点が大きな違いだった。

記事は『ジャズ・シンガー』が当初サイレント映画として構想されていたこと、せりふが話される「トーキー部分」は映画の一部のみであることを述べ、「遠い将来に完全な「トーキー」映画が生まれるかもしれないという素晴らしい可能性はあるもの、現在のブームは時期尚早と言わなければならない」と厳しい評価を下している。

一方で興味深いのは、序曲に続く音楽出し物のなかのブロックス・シスターズ (The Brox Sisters) の歌劇の一場面、「ダウンスウス」(Down South) についてのコメントである。「この三人組のグループは、古臭いプランテーションの歌を強いアメリカ訛り (American accent)<sup>7</sup> で歌ったが、声にもパーソナリティにもさして優れたところはなかった。」と述べている。歌がアメリカ訛りだったことは記者の耳に残ったようである。

「遠い将来に完全な「トーキー」映画が生まれるかもしれない」と書いたこの記者の予想は、次々と生み出されるトーキー映画によって覆された。ここで予告編が上映された『ザ・テラー』はリハーサルでは画像と音声がかちんと同期していたにもかかわらず、本番では音がずれていたと記事は伝える。しかし、『ザ・テラー』は、『ジャズ・シンガー』のロンドン初公開2か月後の1928年11月にはロンドンの映画館で上映された<sup>8</sup>。そしてそのあともトーキー到来の流れが止まることはなかったのである。

### 1.3 アメリカ英語の広がりと言語の英語

サイレント映画からトーキーへの転換期については映画史研究のなかですでに多くの研究の蓄積がある。ここであえて英語研究のひとつの主題としてこのテーマを取り上げる理由を記しておきたい。

第一に、映画はアメリカ英語が今日のような影響力を持つにいたった要因のひとつと考えられているからである。「近年、英国ではアメリカのテレビ番組や映画などを通してアメリカ英語の影響が強まっている」<sup>9</sup> というのは標準的な見解である。さらに今日的な状況の説明として、「アメリカ英語は、主としてマスメディアや娯楽産業の波に乗り、世界に益々浸透し、各地の英語に影響を与えています。例えば、ハリウッド映画の世界進出、テレビやデジタルメディアの普及による映画の再視聴、CNNをはじめとする国際放送の配信域拡大、そしてインターネットやソーシャルネットワークの目覚ましい発展がアメリカ英語のグローバルな拡大に貢献しています」<sup>10</sup> のように説明されることもある。そして、実際のところ、ハリウッド映画や、アメリカ発のニュース、テレビドラマが世界規模でアメリカ英語を伝える媒体となり、アメリカ英語が全地球的に広

がっていく過程を、20世紀後半から21世紀にかけて、私たちは目の当たりにしてきた。トーキーの出現は今日にまでつながる映像を通じたアメリカ英語の拡散の第一歩だったのである。

第二に、筆者はこれまで山口（2013）や山口（2015）などで映画の中で用いられる英語の分析を世界諸英語という観点から行ってきた。そのなかで映画における英語使用の歴史を考えるにあたり、トーキー登場期の英語について調べる必要があると考えるに至った。映画で使われる英語は、20世紀末から21世紀に入り、より本物らしい、オーセンティックな各地の英語の訛りが反映されるようになってきている。これは、世界諸英語（World Englishes）への意識が高まった時代背景と合わせて、ハリウッド映画がアメリカ国外の英語圏（および非英語圏）の市場を考慮するようになったこと、また、インターネットの普及により、観客がよりオーセンティックな英語に触れる機会が増え、意識が高まったことなどの理由が考えられる<sup>11</sup>。映画よりも速く、広く英語音声を伝えることができるインターネットが現れたことで、英語の影響が単線的ではなくなった、ともいえるのである。

映画が英語に与えた影響、映画の英語に対して人々が何を感じたか、何を期待して、どのような言語態度をとったかは、やはり時代を限定して、人々が置かれていた環境のなかで考えなければならない。1920年代末という限られた時点においてイギリス人が誕生したばかりのトーキーのアメリカ英語に示した反応にするのはそのためである。分析の対象を限定したうえで詳細を明らかにすることが、最終的に全体を見渡すときに有用だとも考える。全体というのは筆者がこれまで研究課題としてきた映画における世界諸英語の表象、映画の中の世界諸英語に対する人々の言語態度の解明である<sup>12</sup>。

## 2. 先行研究

本稿の主題に関連する先行研究として、アメリカ映画がイギリス英語に与えた影響に関する研究を概観する。

「海外のアメリカ英語」(American English Abroad)を論じたBailey (2001)によると、アメリカに特有の語や語義を指す「アメリカニズム」(Americanism)という語を最初に用いたのはジョン・ウィザースプーン (John Witherspoon) で1781年のことだった<sup>13</sup>。しかし、イギリスでアメリカ英語に対する「不安と敵意」がおこってきたのは更に遅く19世紀以降であるという<sup>14</sup>。Bailey (2001)の最終節「アメリカ英語の勝利」ではアメリカ映画の影響力が強調された。トーキー以前のサイレント映画の時代から、字幕においてはアメリカ映画がリンガフランカ (lingua franca)、または、リンガカリフォルニカ (lingua californica)として流通していたというのだ。そして、「発声映画はさらにアメリカの言語的流行を大衆化し広げるのに貢献した」<sup>15</sup>とも指摘している。

Bailey (2001)が映画の影響を論じる際に引用した研究のひとつが、Foster (1955)の「標準

英語への近年のアメリカの影響」(Recent American Influence on Standard English)である。特にトーキーに言及した部分は次の箇所である。

「1920年代末に発声映画が到来するまで、大多数のイギリス人は、アメリカの話し言葉にはなじみがなく、それを耳にするのはアメリカの歌の録音か放送を聞くときか、アメリカの有名人の発言がマイクを通して伝えられるのを聞くときくらいであった。しかし、今やイギリスの若者たちは、映画館でアメリカ英語の会話を何時間も耳にして、特徴的な文法、語彙、発音に慣れ親しんで育っているのである。」<sup>16</sup>

次の箇所では、1930年代から1950年代までの約20年間におけるアメリカ英語のステータスの変化の原因のひとつとしてトーキーを挙げている。

「要するに、この20年の間にアメリカ英語の地位は急速に向上した。それは発声映画の発明及び、世界の政治的経済的重心がヨーロッパからアメリカに急速に移動したことが原因である。アメリカ英語は、商業的、技術的な理由から、それまでアメリカ英語になじみのなかった何百万人もの上に押し付けられることになった。より大事なことは、アメリカ英語が、次第に「恥づかしくない」(respectable)ものになってきた、つまり、イギリス英語の奇妙な付属物とはみなされなくなってきた、ということなのだ。」<sup>17</sup>

フォスターのこの論考は彼の1968年に刊行された『変容する英語』(*The Changing English Language*)の第1章「アメリカの影響」と第6章「発音」にも反映されている。特に発音については、「1930年代の初めと言えば、アメリカの発声映画がまさに破竹の勢いで本格的にイギリスに流入した時である」<sup>18</sup>と述べ、映画の影響力がラジオや蓄音機のレコードよりもはるかに大きかったことを述べている。フォスターは続けて、イギリス人は、映画そしてのちにはテレビを通してアメリカ英語に触れ続け、「長年にわたって毎日その発音にさらされたため、おのずとそれが国民に浸透し、ついにアメリカ式の発音に対する抵抗が消滅したのである」<sup>19</sup>とも述べている。

同様の指摘はメルヴィン・ブラッグ (Melvin Bragg) の『英語の冒険』でも行われている。この本は豊富な用例を中心に英語の歴史を物語的に記した一般書であり、調査に基づく研究書ではない。しかしアメリカ映画のイギリスへの影響を記したスタンダードな記述のひとつとしてみておこう。

「映画がイギリスにやってくると、何百万人もの観客が押し寄せ、映画スターの髪型をまねるのに劣らず熱心に、そこで使われている単語や表現をおぼえ、アメリカ発音をまねてみたりした。国民投票をしたら圧倒的にアメリカ英語に軍配があがっただろう。わたしたちがまねをして大喜びしていたという事実が、アメリカ英語への賛辞だった。もちろん非難の声があがった。「二十年前にはイギリス人はだれも start in だとか start out (ともに“取りかかる”) だとか、crack up (ほめそやす)、stand for (我慢する)、fall for (惚れ込む) などとは言わなかった」(『ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』1935年)「大西洋の向こうから来た聞くもおぞましい言葉、to help make (作るのを手伝う)、worthwhile (やりがいのある)、nearby (近くの)、colourful (カ

ラフルな)などがペストのように蔓延している」(『デイリー・テレグラフ』1935年)、「言葉も発音の仕方も実に不快で、このような映画が社会に邪悪な影響をおよぼすであろうことは疑いの余地がない」(保守党国会議員サー・アルフレッド・ノックスへのインタビューから)<sup>20</sup>

このように先行文献においても、アメリカ映画がイギリス英語に大きな影響を与えたことは指摘されている。本稿ではこうした全体的な傾向を踏まえたうえで、トーキー登場の最初期にアメリカ英語がイギリスでどう受け止められたかを考察する。

### 3. トーキーの登場と英語への反応

トーキーの登場によって、サイレント映画の俳優たちに求められる資質は変化した。たとえば、英語の訛り (accents) に対して関心が向けられることになった。そのことは芸能関係の新聞、雑誌記事において、トーキーにおける訛りの主題に触れた記事が増えたことにも現れている。このことを、オンラインデータベース「娯楽産業雑誌アーカイブ」(Entertainment Industry Magazine Archive) を使って、記事の件数の推移で確認しておこう。

「娯楽産業雑誌アーカイブ」は映画、テレビ、演劇、音楽など20世紀の娯楽に関するイギリス、アメリカの商業誌27誌の1880年から2000年までの記事を収録したデータベースで、*Variety* (1905年創刊)、*Boxoffice* (1920年創刊)、*Billboard* (1894年創刊)などのアメリカの雑誌、*Picturegoer* (1911年創刊)、*Film Weekly* (1928年創刊)、*The Stage* (1880年創刊)などのイギリスの雑誌などが含まれる<sup>21</sup>。

トーキーと訛りの両方に言及した記事を talkie/talkies と accent/accents の両方をキーワードとして検索すると、1928年は24件だったものが、1929年には173件と急増するのが特徴的である<sup>22</sup>。1930年137件、1931年126件と100件以上あったが、1932年85件、1933年52件、1934年28件と減っていく。1929年をピークとする3年間にトーキーにおける訛りについて言及した記事が多かったことがわかる。

もともと、トーキー (talkie/talkies) に言及した記事自体が、1928年の1221件から、1929年には3795件と3倍に増えるので、1929年にトーキーについての記事が急激に増え、トーキーと訛りについての記事もそれに従って増えたと考えられる。なお、トーキーについての記事は1930年も3374件と多かったが、その後1931年2383件、1932年1428件、1933年1015件、1934年668件と減っていく。

訛り (accent/accents) に言及した記事も1928年の318件から1929年には483件と増え、1930年に520件と最多となり、1931年476件、1932年412件、1933年382件と、1934年391件と、変化が緩やかではあるがやはり、1929年から1931年にかけての件数が多い。

なお、データベース全体の記事の数は、1928年に79,121件だったものが、その後、1929年82,541件、1930年85,045件と増え、1931年74,861件、1932年73,301件、1933年69,318件、

1934年64,010件と減っており、上記の検索語による記事数の増減は、概ねこの変化に対応しているといえる。しかし、そのなかでも特に、1929年にトーキーについての記事が3倍以上に増えたこと(1221→3795)、また、トーキーと訛りについての記事が7倍以上に増えたこと(24→173)などは、全体の増減傾向の中でも際立った変化といえよう。

#### 4. トーキーのアメリカ英語へのイギリス人の反応

本節ではハリウッド製作の初期のトーキーのアメリカ英語に対するイギリス人の反応を、次の観点から紹介していく。この4つの観点は相補的なものではなく、調査を通じて顕著であった点を挙げるものである。

- (1) アメリカ英語が役に合わないときの反感 (4.1)
- (2) アメリカ英語ではなくイギリス英語のトーキーを待望 (4.2)
- (3) アメリカのトーキーがイギリス英語を損なうという政治的発言 (4.3)
- (4) アメリカ英語批判は不当だという擁護 (4.4)

なお、ハリウッド製作のトーキーでは、アメリカ英語、イギリス英語以外の英語も使われている。英語非母語話者でサイレント映画のスターであった俳優たちのなかには、トーキーに移行して活躍を続けたひととあれば、そうでないひともある。彼らの英語に対する観客の言語態度に関しては、稿を改めて論じたい。

本節の考察は、第3節で述べた娯楽産業データベースアーカイブに収録されている新聞、雑誌、特に *Picturegoer* 誌と *Film Weekly* 誌を調査して行った。

*Picturegoer* は、1921年1月に創刊され1960年4月まで刊行されたイギリスの映画雑誌である。映画ファンのための雑誌 (fan magazine) で、創刊当初月刊だったものが、トーキーが登場して人気を博すようになったのち、1931年5月からは週刊誌 *Picturegoer Weekly* となっている<sup>23</sup>。*Film Weekly* は、1928年10月に創刊され1939年9月に *Picturegoer* に吸収された映画週刊誌である<sup>24</sup>。この2誌はサイレント映画からトーキーへの移行期のイギリスの娯楽産業界で映画を中心的に扱う中心的な定期刊行物であった。

その他に、*New York Times* 紙やイギリス国会議事録 *Hansard* なども用いている。

##### 4.1 アメリカ英語が役に合わないときの反感

トーキーのアメリカ英語については、役に合わないときに違和感を述べる記事が見られる。『ニューヨークタイムズ』紙のロンドン特派員ジョン・マコーマック (John MacCormac) は最初のトーキーのアメリカ英語について批判的な意見を示すことが多かった。例えば、本稿第1

節で紹介したロンドンの『ジャズ・シンガー』公開について扱った記事のなかで、『ザ・テラー』の予告編を見て、「スコットランドヤード（＝英警察）のものだ」と言ったせりふがアメリカ訛りであったことに苦言を呈している。

Also this little advertisement for “The Terror” was a better demonstration of the possibilities of the audible film than “The Jazz Singer” because what there was of it was dialogue, whereas “The Jazz Singer” has virtually no dialogue. It was also, in one sense, a demonstration of sound’s impossibilities, since it involved the announcement by one character in a well defined American accent that he was “from Scotland Yard.”<sup>25</sup>

下線部では「それはある意味で、音の不可能性の証明でもあった。「スコットランドヤードから来た」というせりふを明らかにアメリカ訛りを話す登場人物が述べていたからである」と言っている。音ができること（possibilities）とできないこと（impossibilities）について述べているのだった。

マコーマックは、翌月も『ザ・テラー』の詳しい映画評を『ニューヨーク・タイムズ』に載せている。内容は総じて批判的で、イギリスの批評家たちは予告編や前評判を聞いていたので、期待外れだという思いから酷評してしまうと言っている。アメリカ英語について書かれたところを引用しよう。

Since “The Terror” is supposed to be a film of English criminal life, Hollywood might have remembered that there are no “Captains” So-and-So at Scotland Yard and that no Englishman would ever ask to “be put on to Scotland Yard’s branch office.” Americanisms, anachronisms and solecisms that can be forgiven in a silent film are glaringly noticeable in dialogue, and perhaps this proves the truth of the statement credited to one Hollywood chief that the advent of the talkies implies the death of internationalism. The only American sound film likely to be a real success in Great Britain would seem to be one whose scene is laid in America. The American accent is not really irritating to English ears except when it is credited to “men from Scotland Yard” and the like. How would a New York audience like to hear a Western cowboy address another in this fashion: “I say, old chap, lend me a bob to buy some fags!” or hear a railwayman remark that “a goods train has just fouled the points.”<sup>26</sup>

下線部で述べているのは「サイレント映画では許されたかもしれないアメリカ語法、時代錯誤、間違いは対話に表れると著しく目立つ。トーキーの到来は国際主義の死を意味するとハリウッドの大物が言ったといわれるが、このことは、その発言が真実であることを証明しているのかもし

れない」ということである。

サイレント映画は音がなかったからこそ、国際性、普遍性を持っていたのだという主張はマコーマックのものではなかった<sup>27</sup>。せりふがないからこそ、様々な言語を話す観客が見て楽しむことができ、また、様々な言語を話す俳優が出演できるということがサイレント映画の国際性 (internationality)、国際主義 (internationalism) を保証しているという指摘は他の記事にも見られ、珍しくない<sup>28</sup>。

上記の引用個所に戻ると、下線部では「アメリカ訛りは実のところイギリス人の耳にはさほどいらいらするものではない。『スコットランドヤードの男たち』というようなせりふを話すのであれば」とも述べている。“not really irritating”という言い方に「いらいらすると一般に言われているが」という含意が見えることも含めて興味深い指摘である。

マコーマックはロンドンでの最初のトーキー『ジャズ・シンガー』上映の前、1928年9月9日に、アメリカのことを扱ったアメリカ映画がイギリスで上映されるのは歓迎である旨を『ニューヨークタイムズ』紙に書いていた。「(アメリカ) 訛りが障害となるのは、歴史映画、またはアメリカ以外の国を舞台 (または舞台の一部) にした映画においてである」(It is in historical pictures and pictures wholly or partly representing life in countries other than America that accent will be a bar.) というのである。彼のこの基本的な考え方が、『ザ・テラー』の予告編や本篇公開時の記事にも反映されていた。

『ザ・テラー』のアメリカ英語について他のコメントも紹介しておこう。Film Weekly に載った「最初の全篇発話映画」という見出しの小さな記事である。記者自身は『ザ・テラー』をまだ見ていないが、既に見たという知り合いの映画関係者の感想を伝えている<sup>29</sup>。

#### The First All-Talking Film

... He [=a prominent member of the film trade] is convinced that “The Terror” will prove beyond doubt that the “talkies” have arrived. The only thing that upset him was the strong American accent of some of the artists, which apparently is accentuated by the beautiful English spoken by that fine old actor, Alec B. Francis.<sup>30</sup>

下線部を訳しておく、「彼が唯一腹立たしく思ったのは、何人かの俳優が強いアメリカ訛りで話していたことであった。それは、名優アレック・B・フランシスの英語が美しいのでより際立つことになった。」である。ここでイギリスの映画俳優フランシスには actor という語を使い、アメリカの映画俳優たちには artist という語を使っているのは、文体にバリエーションを持たせるためだけとも思えない。

#### 4.2 アメリカ英語ではなくイギリス英語のトーキーを待望

ハリウッド製作のアメリカ英語を使ったトーキーを批判するイギリス人の反応のなかには、イ



ギリスで作ったイギリス英語のトーキーを見たいという思いも含まれていた。*Film Weekly* の1929年7月1日号の読者投稿欄で紹介された手紙を見てみよう。

Sir, -- American Talkies, up to the present, have only been rather thin musical comedies, the plot of which, when we have found it, usually centres round a good little girl in a night club, or an obscure young genius who composes songs, and to "keep up the interest" a plentiful supply of lewd wisecracks, suggestive scenes and sloppy, unnatural sentiment. This class of picture is on the wane already. Picturegoers are getting tired listening to Americans bawling, nasally and incoherently from the screen.

They want something better, and it is up to the British producers to supply that want in the form of British Talkies with British stars speaking decent English.<sup>31</sup>

投書は北アイルランドに住む男性から送られている。下線部が英語の訛りについて触れたところであり、以下の意味である。「映画を見に行く人たちはスクリーンに映るアメリカ人たちが鼻声で、取り乱して大声で叫ぶのを聞くのにうんざりしています。観客はもっとよい映画を求めています。そして、イギリスのスターがきちんとした英語を話すイギリスのトーキーを作って、そうした要求を満たすのは、イギリスのプロデューサーの役目なのです」

アメリカ英語が鼻にかかった (nasal) 音だというのはこの時期のイギリス人の反応として多い。イギリス英語が「きちんとした」(decent) 英語だというのは、根拠のない自己中心的な判断だが、アメリカ英語に対するイギリス人の言語態度としてはよく見られる反応である。

この投書が載った次の週の *Film Weekly* には「62本のイギリスのトーキー：「後進的」だと責める必要はない」(Sixty-two British Talkies: No Reasons for Accusation of "Backwardness") という大きな見出しの記事が掲載された<sup>32</sup>。

「悲しいことにトーキーの到来のせいでイギリスの映画活動は停止してしまった。それは楽観主義者の胸にも悲観主義者の胸にも同様に絶望をもたらした」(The dreary halt in British film activities caused by the advent of talkies has brought a certain despair to the hearts of optimists and pessimists alike.) という物憂げな一文でこの記事は始まる。「トーキーはイギリス映画にとって誕生か死か？」(Are talkies the birth or the death of British films?) と聞くとたいていの人が「死だ」と答えるが、そうではない、というように記事は展開し、イギリスの映画産業がトーキー製作に積極的であることを伝えている。見出しにある62本というのは、記事を読むと現時点でイギリスで製作中のトーキーだということがわかるが、既に完成しているような誤解を招きかねない見出しである。

この記事のなかでは直接アメリカ英語を批判する記述はない。しかし、「訛りと素材において我々の優越性を活用する」(Exploiting Our Superiority in Accent and Material) という見出しに込められた意味は、イギリス訛りのほうがアメリカ訛りよりも優れているので、そのことがトー

キー製作において有利だということである。このようにイギリス訛りの優越性を説く記事は *Film Weekly* や *Picturegoer* のような映画雑誌では枚挙にいとまがない。もちろんその考えは間違っていると反論する記事もあるが、声大きいのは前者である（4.4 参照）

#### 4.3 アメリカのトーキーがイギリス英語を損なうという政治的発言

アメリカ英語に対する否定的な反応が少なくなかったことを象徴的に示す事柄がある。イギリス庶民院において、保守党の議員ジョン・サンデマン・アレン卿が1929年5月2日、政府教育委員会（Board of Education）委員長に、映画の音声と話し言葉を監視するために英国映画検閲委員会（British Board of Film Censors）<sup>33</sup>と協力する意向があるかどうかを質問したことである。

Sir J. SANDEMAN ALLEN asked the President of the Board of Education whether, seeing that in the view of teachers all over the country, the speech of children is being corrupted by slang introduced in film sub-titles, and in view of the rapid development of sound and talking films, his Department will cooperate with the Film Board of Censors-in exercising vigilance over film sound and speech? <sup>34</sup>

「全国の子供たちは映画の字幕で知る俗語に悪影響を受けているが、発声映画（sound and talking）の急速な発展をかんがみると、これには監視が必要なのではないか」というのだ。

この質問にたいして、教育委員会の政務官キャサリン・スチュワート・マリーは、委員長にはそのような教育的検閲を行う権限はなく、「議員がただ今指摘された弊害に対する改善策は、映画業界に任せなければならない」と言っている。

このあと自由党のロバート・トマス卿が、そもそもこうした映画の上映を阻止できなかった英国映画検閲委員会を改変したほうがいいのではないかと発言し、同じく自由党のジョゼフ・ケンワージーも加勢したが、政務官はそれへの返答は自分の職分外であると述べるにとどまった。

イギリス庶民院でのこのやりとりは、アメリカの新聞でも報じられた。『ニューヨークタイムズ』に1929年5月5日、つまり議員の質問の3日後に掲載された意見がごく常識的な反応であろう。つまり、ヨーロッパではアメリカが脅威のように言われ、トーキーのアメリカ英語がイギリスの子供に悪影響を与えと言われるが、子供が映画館に行くのはどんなに早くとも7、8歳以降であろうし、それまでには言葉を話す際の筋肉や発音習慣はほぼ固定しているであろう、というものである<sup>35</sup>。

同様の質問は、7か月後、1930年2月4日も別の議員から出された。次は保守党のアルフレッド・ノックス卿（Sir Alfred Knox）が、商務院長（the President of the Board of Trade）に、「この国の国民が話しているような英語を保護するために、アメリカの発声映画の輸入を制限してイギリスの映画製作を奨励する手段をとる用意があるかどうか」を尋ねた<sup>36</sup>。商務院長ウィリアム・グレーム（William Graham）の答えは、映画法はイギリスの映画製作を奨励するために制定さ

れた法律であるがアメリカの発声映画に直接制限を設ける用意はない、である。ノックスは続けて、映画法は失敗だったのではないか、「この国におけるイギリス人の言語と考えを守るために何かすべき時ではありませんか (to protect the language and the ideas of Britishers in this country?)」とまで言っているが、商務院長は映画法が失敗だと決めつけるのは尚早であると答えるにとどまった。

ここで重要なのは、イギリスの国会議員が議会でこうした質問をするのはそれが政治的に意味のある話題、つまり国民の支持を得られる話題だからということである。トーキーを通じてイギリスに入ってくるアメリカ英語の規制、監視、検閲の可能性に有権者、国民が関心を持っていると判断したからこそ、こうした質問がなされたのである。

#### 4.4 アメリカ英語批判は不当だという擁護

ここまではアメリカ英語に批判的なイギリス人の反応を見てきた。しかしトーキーで用いられるアメリカ英語やアメリカ訛りを批判したり、馬鹿にしたりするのは不当であると擁護する記事も少なくない。

*Film Weekly* の 1929 年 9 月 9 日号には「アメリカ訛りを擁護する」という投稿が載っている。

##### Defending American Accent

I am not a talkie enthusiast, but I would like to put in a good word for the much maligned American accent. One would imagine, from the majority of views expressed, that America had no exponents in the art of cultured speech. I consider many of the newcomers recruited from the American stage possess as attractive voices as their British confrères.

(訳：アメリカ訛りを擁護する)

私は熱烈なトーキーファンではありませんが、散々悪く言われているアメリカ訛りを一言擁護したいと思います。これまでに表明されている意見の大半から考えると、アメリカには教養ある話し方をする人は誰一人としていないと思ってしまう。私はアメリカの演劇舞台から映画界に引き抜かれた新しい俳優たちは、イギリスの俳優たちと同じくらい魅力的な声を持っていると考えています)

もっともここで擁護されている舞台から引き抜かれた俳優たちというのは、アメリカ英語というよりもイギリス英語に近い舞台用の英語を話していた可能性が大きい<sup>37</sup>。なので、この記事は、「鼻にかかったアメリカ訛り」を擁護しているわけではないだろう。

*Picturegoer* では読者からの投稿のなかで、最も優れたものに 2 ギニー、二番目に 1 ギニーを賞金を出している。1929 年 11 月号で 2 ギニーを得た投稿は、アメリカ訛りを批判するイギリス人を批判するものであった。

It strikes me that Britishers are being a little unfair towards America in their scornful attack upon that much maligned American accent. After all, Hollywood makes talkies for the enjoyment of the American population, who naturally see nothing wrong with their way of speaking English.

One might just as well blame a Scotchman or an Irishman for his accent as blame Americans for theirs.

Speaking from their point of view—a thing which no other British fan seems inclined to do – I must say that they would probably find our talkies, recording 'English as it should be spoken,' just as unpleasant to the ear as we find theirs, simply because the way we speak would be unfamiliar to them.

(訳： 散々悪口を言われているアメリカ訛りをイギリス人は侮蔑的に攻撃しますが、それはいささか不公平ではないかと私には思えます。結局のところ、ハリウッドはアメリカ国民の楽しみのためにトーキーを作っているわけですし、彼らが自分たちの英語の話し方に何の不都合も感じないのは当然です。

アメリカ人の訛りを非難するなら、スコットランド人、アイルランド人の訛りも非難しなければなりません。

アメリカ人の立場に立ってみると—イギリスの映画ファンはこういうことをしたがるにやうですが—「英語のあるべき姿」を録音したものであっても、彼らの耳には不愉快に響くことでしょう。それは私たちの話し方がアメリカ人にとってはなじみがないものだからです。)

興味深いのは同誌の1929年10月号で1等賞を得た投稿にも同様に、アメリカ訛りを擁護する一節が含まれていることである。

The nasal accent too, is unjustly criticised, because as much as the American accent sounds awful to many of us, so does the English accent to the Americans.<sup>38</sup>

(訳：鼻音の訛りへの批判は正当ではありません。というのも私たちにとってアメリカ訛りの音が耐え難いものであると同様、イギリス訛りというのもアメリカ人にとっては耐え難いものだからです)

映画ファンを読者とするこの雑誌の編集方針として、アメリカ訛りの英語について肯定的な意見を載せることがあったとしても不思議ではない。これについてはさらに詳しく調べる必要があるが、アメリカ英語の発音に対する肯定的言語態度がこの時期のイギリスの映画雑誌に一定数見られることに注意しておきたい。

最後に、この時期の新聞、雑誌記事で、アメリカ英語を表すときによく使われる語である「鼻音の」(nasal)、「鼻にかかった声」(twang)について述べておきたい。これは批判的な文脈で使われることがほとんどであった。一方でアメリカ英語とイギリス英語の発音を比較した際のわかりやすい特徴として今日よくあげられるものとして「母音のあとの r を発音するかどうか」(rhotacism/nonrhotacism)<sup>39</sup>や「母音にはさまれた /t/ がはじき音となる」(medial flap)<sup>40</sup>などがあるが、これらへの言及は今回調査した記事のなかにはなかった。

その理由としてまず「鼻にかかった」音であることが一番際立って耳に残った特徴であり、特徴として言及にされたということが考えられる。そして第二に、これが雑誌記事などで記述する際の定型的な表現だったという可能性も否定できない。というのも前述のように *Picturegoer* や *Film Weekly* の記事のなかでは、アメリカ英語が鼻にかかった音であることに言及したうえで、それでもかまわないではないかというレトリックが散見されるからである。

## 5. 結びにかえて

本稿では、1920年代末のハリウッド映画をめぐってイギリスの観客がそのアメリカ英語にたいしてどのような言語態度を示したかを、当時の新聞、雑誌記事を調査して論じた。アメリカ英語の発音に否定的・批判的な反応があったことはある程度予想できたことであったが、その批判を抑えるかたちで耳慣れない訛りを受容しようと呼びかける声の存在が確認できたことは重要である。

トーキーの黎明期に、映画から聞こえてきた音声言語に人々がどう反応したか、どのような言語態度をとったかという主題の研究は筆者にとって緒に就いたばかりである。世界諸英語が映画で聞かれるようになるまでに、映画の英語がどのように変わり、観客の言語態度がどう変わっていったのかを引き続き調べていきたい。

### 注

<sup>1</sup> 本稿は科研費研究課題「英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究—映像メディア分析と教育的活用」(基盤研究(c) 研究課題番号16K02885 研究代表者山口美知代(50259420)による研究成果の一部である。本稿の一部は、第40回速記科学研究会(速記・言語科学研究会合同例会、名古屋港ポートビル、2016年9月4日)および、第83回現代英語談話会(芝蘭会館、2016年9月18日)で発表した。本稿のための調査はニューヨーク公共図書館舞台芸術図書館で行った。また、本稿のための調査と執筆は京都府立大学文学部での研究専念期間中に行った。この機会をいただいたことに深く感謝申し上げたい。

<sup>2</sup> トーキーの誕生についてはサドゥール(2000)参照。『ジャズ・シンガー』は会話が映像と同期した最初の映画である。音(効果音や音楽)が映像と同期した最初の映画は『ドン・ファン』で1926年に製作

された。

<sup>3</sup> *The Melody Maker*. November, 1928. pp.1277-78. The Debut of THE “TALKIES”: What Happened at “The Jazz Singer”

<sup>4</sup> 1926年創刊の音楽雑誌。

<sup>5</sup> *The Jazz Singer* は一部だけに台詞が入っているパートトーキーで、イギリスで最初に上映されたオールトーキーは *The Terror* であった。ワーナーブラザーズはこれより前にオールトーキーの *The Lights of New York* を製作、アメリカで公開している。

<sup>6</sup> サイレント映画の上映形式については加藤（2006）pp.107-108 参照。

<sup>7</sup> 本稿では accent の訳語として「訛り」を使う。

<sup>8</sup> “Talkers in Britain” by John MacCormac. *New York Times*. Nov 18, 1928.

<sup>9</sup> 寺沢（2008）p.140.

<sup>10</sup> 平賀（2016）p.50.

<sup>11</sup> 山口（2013）p.85.

<sup>12</sup> 山口（2013）、山口（2015）、山口（2016）など参照。

<sup>13</sup> Bailey（2001）p.459. Witherspoon（1781）

<sup>14</sup> Bailey（2001）pp.482-

<sup>15</sup> Bailey（2001）p.493.

<sup>16</sup> Foster（1955）p.329.

<sup>17</sup> Foster（1955）p.329.

<sup>18</sup> Foster（1968）の邦訳フォスター（1973）p.269.

<sup>19</sup> Foster（1968）の邦訳フォスター（1973）p.269.

<sup>20</sup> Bragg（2003）の邦訳ブラッグ（2004）p.337.

<sup>21</sup> Pro Quest 社の Entertainment Industry Magazine Archive 概要説明サイト

<http://www.proquest.com/products-services/eima.html>

<sup>22</sup> 同時期の英米の新聞や雑誌には talkie という語は引用符つき “talkie” で使われていることが多い。綴りは talkie が標準だが、talky と綴られていることもある。talking picture, talking film が使われることも多い。このほかには、sound film, sound picture という言い方もある。ごくまれに speakie という語が引用符つきで使われることもある。

<sup>23</sup> British Library—Cinema and Film Periodicals: British and Irish, Picturegoer.

<http://www.bl.uk/reshelp/findhelpsubject/artarchperf/film/britirishfilm/index.html#picturegoer>

<sup>24</sup> British Library—Cinema and Film Periodicals: British and Irish, Film Weekly Picturegoer.<http://www.bl.uk/reshelp/findhelpsubject/artarchperf/film/britirishfilm/#f>

<sup>25</sup> “London Cheers Sound” by John MacCormac. *The New York Times*. October 14, 1928.

<sup>26</sup> “Talkers in Britain; Grouped Players” by John MacCormac. *The New York Times*. November 18, 1928. <http://www.nytimes.com/movie/review?res=9E01E5DD1239E637A2575BC1A9679D946995D6CF>

&pagewanted=print

<sup>27</sup> サイレント映画時代には英語非母語話者の俳優がハリウッド映画で活躍していた。トーキーの到来によって、こうした俳優たちが英語が流暢でないこと、また流暢であっても「外国人訛り」があることが問題視されるようになる。サイレント映画のもつ国際主義 (internationalism)、国際性 (internationality) がトーキーの到来によって失われるという主張は、英語非母語者であるサイレント時代のスターたちの活躍の場が無くなるという予想とも結びついている。

<sup>28</sup> たとえば “What Do You Think? Your Views and Ours” *Picturegoer*, August 1929, p.60 では “The silent drama has a universal appeal, since pantomime, unlike speech, is understood by all races.” と読者の投稿で記されている。

<sup>29</sup> 厳密なことをいうと、この映画関係者がジョン・マコーマックだという可能性は（大きくはないであろうが）確実な反証がないので否定はできない。

<sup>30</sup> *Film Weekly*, October 22, 1928.

<sup>31</sup> “Plea for British Talkies—To the Editor of Film Weekly” *Film Weekly*, July 8, 1929.

<sup>32</sup> “Sixty-two British Talkies: No Reasons for Accusation of “Backwardness”” *Film Weekly*, July 8, 1929.

<sup>33</sup> 英国映画検閲委員会は 1909 年の映画法により、1912 年に成立した独立機関で、1985 年に英国映画分類委員会 (British Board of Film Classification) と改称。松川 (2010)、吉村 (2013)

<sup>34</sup> [http://hansard.millbanksystems.com/commons/1929/may/02/talking-films#S5CV0227P0\\_19290502\\_HOC\\_76](http://hansard.millbanksystems.com/commons/1929/may/02/talking-films#S5CV0227P0_19290502_HOC_76)

<sup>35</sup> *New York Times*, May 5, 1929.

<sup>36</sup> <http://hansard.millbanksystems.com/commons/1930/feb/04/american-talking-films-importation>

<sup>37</sup> 20 世紀初頭アメリカの演劇でどのような英語が用いられていたかについては Knight (2000) 参照。

<sup>38</sup> *Picturegoer*, October 1, 1929.

<sup>39</sup> 英米の rhotacism/nonrhotacism の歴史的経緯は Fisher (2001) pp.75-77 参照。

<sup>40</sup> Montgomery (2001) p.139 参照。water がワラに聞こえるような例。

## 参考文献

日本語文献

板倉史明 (2016) 『映画と移民—在米日系移民の映画受容とアイデンティティ』 新曜社

井野瀬久美恵 (1990) 『大英帝国はミュージック・ホールから』 朝日新聞社

岩本憲児 (2007) 『サイレントからトーキーへ』 森話社

加藤幹朗 (2006) 『映画館と観客の文化史』 中央公論社

北野圭介 (2001) 『ハリウッド 100 年史』 平凡社

紀平英作・亀井俊介 (1998) 『アメリカ合衆国の膨張 世界の歴史 23』 中央公論社

サドゥール, ジョルジュ (1997) 『無声映画芸術の開花 アメリカ映画の世界制覇 [1] 1914-1920』

世界映画全史 7 丸尾定、村山匡一郎・出口丈人・小松弘訳 国書刊行会

- サドゥール, ジョルジュ (1999) 『無声映画芸術の成熟 ハリウッドの確立 1919-1929』  
世界映画全史 11, 丸尾定訳 国書刊行会
- サドゥール, ジョルジュ (2000) 『無声映画芸術の成熟 トーキーのあし音 1919 - -1929』  
世界映画全史 12, 丸尾定、出口丈人、小松弘訳 国書刊行会
- 杉野健太郎編 (2015) 『映画とイデオロギー』 ミネルヴァ書房
- 杉山匡一郎編 (2013) 『映画史を学ぶクリティカル・ワーズ』 フィルムアート社
- 寺澤盾 (2008) 『英語の歴史—過去から未来への物語』 中央公論社
- 平賀正子 (2016) 『ベーシック新しい英語学概論』 ひつじ書房
- 松川俊夫 (2010) 「英国及び米国に於ける映画規制の倫理」 『メディアの哲学の構築研究成果報告書』  
<file:///C:/Users/Yanagi/Downloads/kaken-19520007-00530057.pdf>
- 山口美知代編 (2013) 『世界の英語を映画で学ぶ』 松柏社
- 山口美知代編 (2015) 『科研費研究課題 世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語』
- 山口美知代編 (2016) 『世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語教育 平成 27 (2015) 年度科研費研究課題研究成果報告書』
- 吉村いづみ (2013) 「イギリス映画の統制—映画法 (1909 年) の背景と、関連する様々な規制・法令について」 『名古屋文化短期大学研究紀要』 第 38 集 1-9
- ロメール、エリック、クロード・シャブロール (2015) 『ヒッチコック』 木村建哉、小河原あや訳 イン  
スクリプト
- 若田部博哉 (1985) 『英語学大系第 10 巻英語史 IIIB』 研究社

#### 英語文献

- Algeo, John ed. (2001) *The Cambridge History of the English Language Volume VI English in North America*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Algeo, John (2001) External History, 1-58. in Algeo (2001) .
- Bailey, Richard W. (2001) American English Abroad, 471-496. in Algeo (2001) .
- Bragg, Melvin (2003) *The Adventure of English*. (メルヴィン・ブラッグ (2004) 『英語の冒険』 三川基好訳 アーティストハウス)
- Cassidy, Frederic G. and Joan Houston Hall (2001) Americanisms, 184-218. in Algeo (2001).
- Dudley, Knight (2000) Standard Speech: The Ongoing Debate. Rocco Dal Vera ed. *Standard Speech: and other contemporary issues in professional voice and speech training*. 31-54.
- Fisher, John Hurt (2001) British and American, Continuity and Divergence, 59-85. in Algeo (2001).
- Foster, Brian (1955) Recent American Influence on Standard English, *Anglia*, 73:328-60.
- Foster, Brian (1968) *The Changing English Language*, Palgrave (ブライアン・フォスター (1972) 『変容する英語』 吉田弘重訳、研究社)
- Hitchings, Henry (2011) *The Language Wars: A History of Proper English*. London: John Murray. (へ



- ンリー・ヒッチングズ (2014) 『英語化する世界、世界化する英語』 田中京子訳 みすず書房)
- Lippi-Green, Rosina (2012) *English with an Accent: Language, Ideology, and Discrimination in the United States*. Routledge.
- Mugglestone, Lynda (1995) *Talking Proper: The Rise of Accent as Social Symbol*, Oxford: Clarendon Press.
- Patridge, Eric and John W. Clark. 1968 (1951) *British and American English since 1900*, Greenwood Pub Group.
- Robertson, James C. (1989) *The Hidden Cinema: British Film Censorship in Action, 1913-1975*. London: Routledge.
- Tucker, Gilbert M. (1921) *American English*. New York: Alfred. A. Knopf.
- Witherspoon, John. (1781) "The Druid," nos. 5-7. *Pennsylvania Journal, or, Weekly Advertiser* (Philadelphia, May 9, 16, 23, 30). Reprint in Mitford M. Mathews ed. (1931) *The Beginnings of American English: Essays and Comments*, 13-30. University of Chicago Press.

(2016年10月3日受理)

(やまぐち みちよ 文学部欧米言語文化学科准教授)